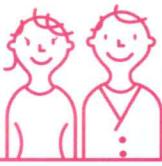


# 「慰安婦」問題とジェンダー平等ニュース



第13号 2013年8月7日発行

2010年7月15日創刊



発行：「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナール 〒344-0012 春日部市六軒町77 吉川気付

電話&FAX 048-738-1780

ブログ <http://ianhu.cocolog-nifty.com/>

## 〉 安倍政権の改憲策動を止めるために

副代表世話人 大森典子

7月に行われた参議院選挙で自民党は圧勝し、安倍政権は安定政権として、改憲に取り組む、と報道されています。週刊誌などによれば、次の参議院選挙がおこなわれる2016年までは自民党政権が続くとして、いよいよ安倍内閣は改憲を実現する決意だとのことです。その自民党の憲法改正草案は、天皇を元首とし、国民の権利・自由を無制限に制限できることにして、「国防軍」を設けようというものです。その前文に示された歴史観は、過去の戦争の反省どころか、日本は過去から一貫して世界に誇る「歴史と伝統」を持っているのだ、ということを強調しています。しかし「慰安婦」問題はあの戦争の加害の象徴的な問題ですから、「慰安婦」問題の事実とその背景をきちんと学び、広げることによって、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることがないようにする」決意を新たにすることができます。ちょうど日本維新の会の橋下代表が「慰安婦」制度は必要であった、と発言し、いま「慰安婦」問題はまた国民の関心を呼んでいます。

今回の選挙での維新の会の失速は、この橋下発言に原因があるといわれていますが、うわべだけ関心に終わらせるのではなく、この機に、改憲阻止の力になる学習活動を進めましょう。



## ナムの家のハルモニが来日

9月22日～9月29日まで「ナムの家」のハルモニ（親しみを込めた“おばあさん”的意）3名が来日し、東京と京都でご自身の体験、日本政府への要望等を話します。受入れ団体は新婦人中央本部、民青、日本AALA連帯委員会と私たちの「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナールです。

「ナムの家」で共同生活を送る元「慰安婦」被害者の平均年齢は88歳です。「慰安婦」問題とは何かを広く知っていただきたく、そして次世代にこの問題を引き継ぐため特に中学、高校、大学生等若い方どうぞ積極的にご参加ください。



## 日本軍「慰安婦」問題を考える集いの日程

9月23日(月・秋分の日)

「ハルモニから若い世代へ」

時 間：13:30～16:00

場 所：日本青年館 中ホール

参加費：500円

メール：njwa@shinfujin.gr.jp

F A X：03-3814-9441

内 容：  
●来日されるハルモニ、イオクソンさん、  
カンイルチュルさん、パクオクスンさんのお話

●キムハクスンさんの証言ビデオ上映

1991年初めて『慰安婦』と名乗りを上げ日本政府を提訴、  
一審裁判中に死去

●ミニ学習・日本軍「慰安婦」問題って？

※事前のお申し込みが必要です。

9月24日(火) 「院内集会」

※国会の会議室が決まり次第、  
詳細はチラシでお知らせします。

# 第10回ゼミナールの報告

事務局長 棚橋昌代

6月30日、渋谷区女性センター・アイリスで開催されたゼミには、事前の問い合わせなどもあり64名が参加。インターネットでも中継され400名余がアクセス。大森典子副代表世話人は、「橋下発言」に対する当ゼミナールの抗議声明、30余の地方自治体の撤回決議などにふれ、彼の発言の根拠は安倍首相と同じものと指摘。続いて、中塚明奈良女子大名誉教授の講演は、「歴史を踏まえずして未来を語れるか—「江華島事件から『慰安婦』問題へ、そして今の日本」。安倍・橋下の論は国際的に大きな批判を受けているのに、なぜ日本で通用するのかという問い合わせから始めた。ほとんどの日本人が日本の近代史、植民地支配の実態を知らない。「江華島事件」から話すのは、日本国がしたことを事実に基づいて語るべきだからだ。1875年日本軍は江華島を3日間も攻撃したのに、1日とした報告書を提出。公的な報告そのものが嘘なのだ。その後の日清戦争の戦場は朝鮮だった。戦後歴代の日本政府、マスコミ、思想界、知識人は日本の朝鮮侵略の事実に知らん顔している。朝鮮を正視しなかったことが、日本のアジア侵略の発端。東京裁判は朝鮮侵略までさかのぼらず、1928年以降のことですませたことが、今の日本の歴史認識の問題点だと指摘。歴史の事実を正確につかみ、事実と向き合うことから逃げてはいけないと叱咤激励された思いだった。



## この夏再び「慰安婦」問題解決のうねりを

### 8月14日をメモリアルデーに！

昨年12月、台湾で行われた「慰安婦」問題解決アジア連帯会議で、1991年に金学順さんがはじめてカメラの前で被害を告白した8月14日を「日本軍『慰安婦』メモリアルデー」にしようという運動がおこっています。そしてこの日を国連の記念日にしようという声も高まっています。ちょうどこの日は水曜日。ソウルをはじめとして世界で連帯して、この日をメモリアルデーにするためのさまざまなイベントが行われます。日本でも「日本軍『慰安婦』問題解決全国行動」を中心となって、全国で連帯した「水曜デモ」が予定されています。また8月11日には国際シンポジウムも行われます。

さらに9月には「ナヌムの家」からハルモニが来日し23日には、証言集会が日本青年館で開かれ、24日には議員にも被害者の言葉を直接きいてもらう院内集会が開かれます。

被害者から直接お話を聞ける最後の機会になるかもしれません、この機会を成功させるために、多くの人と手を取り合って準備をしたいと思います。



「慰安婦」被害にあつたことを  
はじめて名乗り出した金学順さん  
（1994年浦和教育会館にて）

### 「ナヌムの家」のハルモニを迎えて 日本軍「慰安婦」問題の 早期解決をめざす近畿の集い

ハルモニの皆さんは東京での証言が終わった後、京都へ行き4日間をすごします。「つどいの」前後はゆっくりした時間が用意されます。東京へは行けない会員さんも、ぜひ京都の方へ足をお運びください。

日 時 9月28日(土) 13:30～16:30

場 所 YIC京都工科大学校ホール  
JR京都駅から5分

参 加 費 500円

#### 内 容

##### ●DVD「15のときは戻らない」上映

「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナール世話人代表の吉川春子と棚橋昌代事務局長がナヌムの家に泊まり込み、同会世話人の宮崎信恵が監督・撮影

##### ●吉川春子さんのコーディネートで 直接ハルモニからの証言

##### ●文化行事 ●意見交換・これからの取り組み

#### 主 催

新日本婦人の会京都府本部

電話:075-342-1552 FAX:075-342-1553

日本軍「慰安婦」問題の早期解決をめざす大阪の会

大阪府アジア、アフリカ、ラテンアメリカ連帯委員会内

電話:06-6768-5360 FAX:06-6768-5361

# 各地の取り組みから

## 『ハルモニ証言集会in広島』に参加して

5月19日 具島順子

あっ!車椅子だ!空港到着の吉元玉ハルモニの姿に胸が痛んだ。84歳と87歳の二人のハルモニは沖縄、福山、広島、神戸、京都、大阪を渾身の力で証言にまわられた。広島集会は雨の中、九州から関東から230人が駆けつけ、立錐の余地もない。昨年は持病と手術で三ヶ月入院。この来日に備えて身体を整えられたそうだが、お一人で証言をこなされる力はすぐではなく、彼女のために作られた「詩」を朗読され、参加者はじっと通訳に耳を傾けた。

「騙されて連れていかれた」ことは知っていたが、「父が警察に拘束され、釈放に10円のお金が必要だった。そのお金を稼ごうと、『工場で働けば稼げる』と言われ家族にも告げずについていった」と真相を初めて詩で語られた。わずか満12歳の少女が父を思って。そうだったのか。戦後、朝鮮に帰り着いた時には南北に分断されついに故郷の地を踏むことは叶わなかった。「慰安所」では抵抗したら頭を銃の柄で殴られ服もぬげないほど血だらけに。生理だと言えば休ませてもらえるかと…。しかし、管理者には怒鳴られ従うしかなかった。ハングルでハルモニが読み上げられる詩は「慰安所」の生活を生きしく語っていた。韓国から付き添って来られた事務所長がハルモニの思いを代わって話されたが、ハルモニは思いが募るのか、何度もそのマイクを取り上げて話された。折りしも「橋下発言」に日本中怒りが渦巻いていた時であり、「被害者が生きているのにひどいことを言う。本当に聴くに耐えない」と怒りをぶつけられた。

この「証言集会」に駆けつけたみんなは、「生の証言を聞く機会はもうないかもしれない」の思いだったのじゃないだろうか。

## 学習会で盛り上がる 群馬

吉村姫子

6月16日(日)、群馬AALA主催の「慰安婦」問題講演会が前橋で開催されました。会場は100名余で、学習と元兵士の証言で充実した集会でした。その前日(土)は伊勢崎平和委員会による「慰安婦」問題講演会が吉川代表の講師で行われています。少しづつ群馬でも活動家集団による「慰安婦」問題への取り組みが進んでいます。

16日当日の講演会では、第1部は基調提案と歴史的事実の報告、第2部では高崎在住の元兵士(91歳)の生々しい証言がありました。特に元兵士の証言は参加者にとっては事実の恐ろしさとショックで声も出ない緊張の連続だったと言っています。敗戦直前、初年兵として出兵した彼は満蒙国境の警備につき、戦争参加は無かったが日常上官による殴る、蹴るの指示、命令が、土日の「慰安所」通いの時だけは暴行が無く、おだやかであったこと。300人の軍隊を7人のアジア女性が性奴隸として酷使されていたこと。「慰安所」通いの日には兵士にコンドームが配られるが、初年兵や年少者の分は取り上げられ、上官の思いのままに使用されていたこと。この「慰安所」は中国、朝鮮の地図で多数マークされ、その数の多さに驚かされたことなどがリアルに証言されました。

AALAでは、今後、人権思想、ヒューマニズムの国際的視点で、日本のアジア蔑視にもとづく侵略と戦争の実相を掘り下げる集会を考えているようです。

哀惜

## 最期まで社会変革の情熱を燃やし続けて



去る7月25日(木)、世話を一人、和田章子さんがお亡くなりになりました。享年80歳。和田さんは昨年4月に胃がんが発見され、余命数ヶ月と宣告されましたが、病に屈することなく「慰安婦」問題の早期解決に情熱を燃やし続けました。病気の進行で食事が十分に咽喉を通らなくなても、病をおして世話をややゼミには欠かさず参加し、積極的に発言するなど、その姿は気迫に満ちていました。

おりしも参議院議員選挙のなか、17日には腹水がたまって苦しい中、保守反動の政治を変えるために不在者投票を済ませ、翌日入院。入院後はこん睡状態が続いていましたが、吉川さん、棚橋さんがお見舞いに駆けつけると気がついたようでした。

ジェンダーゼミだけではなく、多くの仲間たちから愛された和田さんの姿をもう見ることができるのは残念です。命尽きる最期までジェンダー平等と社会を変革したいとの情熱を燃やし続け一生懸命に生きました和田章子さん。

あなたの意思は遺されたものが必ず引き継ぎます。安らかにお休みください。



# 第11回「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナールのお知らせ

日 時：2013年9月21日（土）13:30～17:00  
場 所：ウィルあいち 愛知県女性総合センター

## 第一部

ドキュメンタリー映画  
「終わらない戦争」(60分) 金東元監督  
— 被害者たちの、そして私の戦争は終わらない —

## 第二部

講演：「戦争の中の女性」 講師：井川一久氏  
— 「慰安婦」問題にも触れて —

●みんなで歌って「ムクゲ」の歌 作詞・作曲 中山淑子

## 講師紹介-井川さんのプロフィール

元朝日新聞那覇支局長・サイゴン支局長  
日本には数少ない戦争ジャーナリスト。ベトナム戦争の1960年代から90年代まで、朝日新聞那覇支局長を振り出しにブノンベン、サイゴン各支局長を歴任。朝日ジャーナル副編集長としてロッキード疑惑事件を徹底追及した後、91年からハノイ初代支局長、東京本社編集委員、早稲田大学などの非常勤講師、大阪経済大学アジア太平洋研究センター客員教授。1934年愛媛県生まれ、早大卒。

主な著書：

「このインドシナ」「カンボジアの戦慄」「新版カンボジア黙示録」「世紀末症候群」「危機に立つアンコール遺跡」「インドシナの風」など。  
訳書に「戦争の悲しみ」バオニン原作

今回のゼミナールは、初めて愛知で開催されます。どうぞ名古屋にお越しください。



## ウィルあいち 愛知県女性総合センター

住 所：愛知県名古屋市東区  
上堅杉町1番地

交 通：名古屋市営地下鉄  
「市役所」駅下車  
2番出口より東へ徒歩約10分

参加費：1000円（学生500円）

連絡先：090-7033-3824（水野）  
090-4227-7498

## 「ナヌムの家」のハルモニを迎える会からカンパの訴え

別紙のチラシの通り、9月に韓国から日本軍「慰安婦」被害者のハルモニたちが来日します。平均年齢88歳と高齢になったハルモニ達の「今回の海外証言会としては最後になるかもしれない。今のうちに日本に」「生涯の思い出を」の願いを実現できないかという相談が新婦人と「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナールにありました。「慰安婦」問題の解決を求めて活動してきた私たちの会ではこのことを世話人会に諮り、ハルモニ達の来日を心から歓迎するとともに、全面的な協力をすることになりました。

おりしも、橋下暴言に続き、安倍政権の選挙で圧勝した安倍政権との「慰安婦」問題解決のたたかいは正念場を迎えます。そればかりでなく、女性の人権、沖縄基地問題、侵略戦争と加害責任、憲法改悪等についても同様です。ハルモニ達の来日と証言は貴重な機会です。つきましては、ハルモニたちの今回の来日に当たって100万円を超える費用が必要となっており、そのためのカンパを広くお願いするものです。

運動を広げながら、みなさまの心のこもった資金面でのご協力を切にお願いいたします。

カンパの送り先は、「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナール宛て、「ナヌムの家のハルモニ来日カンパ」と印刷された郵便振替用紙をご利用くださいますよう、お願ひいたします。

## 第10回

「慰安婦」問題とジェンダー平等ゼミナール

2013年6月30日

### 歴史を踏まえずして未来を語れるか

-「江華島事件」から「慰安婦」問題へ、

そしていまの日本-

中塚 明（奈良女子大学名誉教授）

#### はじめに

橋下徹大阪市長がアメリカに行けなくなつたのは、彼らの言っていることが、日本の国境外では通用しないことを端的に物語る出来事でしたね。安倍首相はアメリカに行きましたが、韓国や中国にはまだ行けないでいます。

私は安倍首相や橋下大阪市長などの言説に、人類史的な意味で未来はまったくないと思っています。——では、なぜ日本の国内では通用しているのか。このことを、今日は皆さんと考えたいのです。

私は率直に言って、日本の思想状況に楽観はしていません。われわれ日本人の歴史に関する知識は、大変危ういものだと思っています。

橋下大阪市長は、慰安婦問題についての暴言以後も、「強制的に連行した証拠はない」などと言っていますが、この人は、日本が朝鮮を植民地として支配していた時期に、朝鮮人がどういう状態におかれていたのか、まったく知らないのではないかでしょうか。

私は1975年に、尾崎陞弁護士を団長とする日・朝合同の「東北地方朝鮮人強制連行真相調査団」に参加しました。班を三つにわけ、私は宮城県・岩手県に行きました。宮城県の細倉鉱山（戦争中は三菱鉱業が経営していた日本の代表的な鉛・亜鉛の鉱山）の調査を終えて帰るとき、強制連行されて敗戦後も祖国に帰ることができなかつたその朝鮮人がポツリと言いました。——「連行された朝鮮人は「喪家の犬」にもおとる」と。

「喪家の犬」とは、喪中の家では悲しみの

ため、犬の世話を忘れるがちになり、犬がしょんぼりする、人がひどくやつれて、しょんぼりしていることのたとえにいう言葉ですが、その「喪家の犬」にもおとっていたのが植民地時代の朝鮮人だった、どんな仕打ちに合おうと、訴えて行くところがない、保護者がどこにもいない、そういう境遇だった、——と語ってくれました。「慰安婦」とされた女性も同様であります。

こういうことが、いま橋下大阪市長にしても安倍首相らにしても、まったくわかっていない。彼らがわかっていないだけはありません。私は奈良でも依頼されて講演することがよくあります。いろいろ日本の朝鮮侵略や植民地支配の話もします。ところが、話が終わると、「先生、そういうけどナ、いまの北朝鮮はナア……」などと質問する人もいて、私が話をしたことなどわかつてもらえない場合が、しばしばあります。

それはもちろん現在の政治状況、あの2002年、小泉訪朝以後、来る日も来る日も「北朝鮮バッシング」に明け暮れたマスコミの報道等々が、作用していることでもありますが、一般に、日本人は、朝鮮のこと、日本人が朝鮮にしたこと、朝鮮が植民地化される過程のこと、それとたたかった朝鮮人のことなど、マスコミの従事者も含めて、残念ながらほとんど日本人は知らないですね。

比較的、歴史を知っているような人でも、私が日清戦争の時、日本軍が朝鮮の王宮占領をして戦争が始まる、というようなことを言うと、「そんなことはどこの国でもやっている、お前は歴史家のくせにそんなことも知らんのか」と罵声を浴びる。帝国主義のあくどい仕業を私も知らないわけではありませんが、日本が朝鮮にしたことなどにも知らないで、「どこの国でもやっている」と、日本の朝鮮侵略の事実に向き合わない。あるいはもっと物分かりがよいと思われる人でも、「帝国主義国というのは、やっていることを隠すのが習い性だ」などと解説して、そしたら、日本は朝鮮

にしたことなどなことを隠しているのか、  
というと、なにもあまり具体的には知らない  
ですませている。——そういうのが今の日本  
によくある光景ではありませんか。

## 1. なぜ「江華島事件」から今日の話を 始めるのか

それで、今日は近代日本、明治になってから  
の日本が朝鮮にどのような形で侵略をはじめたのか、そのはじめにさかのぼって話をする  
ことにします。  
1875年（明治8年）9月20～22日、日本が  
明治になって初めて、朝鮮に大砲を打ち込み、上陸して戦闘もし、砲台の大砲も奪つてくるという事件を起こしました。これが  
「江華島事件」です。

江華島というのは、朝鮮の西海岸の中央部、  
ソウルの表玄関に位置しています。大きさは  
淡路島の半分ぐらいですが、朝鮮にとっては  
首都を守る戦略的に大変重要な島です。

日本の「雲揚」という軍艦、排水量は245  
トン、木製の小さな砲艦に過ぎませんが、艦  
長井上良馨海軍少佐の指揮のもと、この事件  
を引き起こしたのです。

井上良馨は雲揚を指揮して、これより前、  
この年の5月から7月にかけて、朝鮮の東海  
岸を武力で威嚇しながら偵察してきました。7  
月に長崎に帰って来て、海軍の中央に偵察の  
報告と朝鮮征服の意見書を出しています。一  
・朝鮮を日本が所有すれば日本の国基礎は  
ますます強くなり世界に雄飛する第一歩にな  
る、朝鮮はいま一揆も起こって政治が乱れて  
いる、攻撃するチャンスだ、このチャンスを  
逃せば後悔することになる、ただ「日夜出兵  
ノ御指令ヲ待ツノミ」と（原文「八年七月雲  
揚艦長井上良馨報告書」、防衛研究所戦史部図  
書館所蔵。中塚明『現代日本の歴史認識』高  
文研、2007年に全文収録）。

この雲揚艦長井上良馨の意見をいれて雲揚  
を朝鮮の西海岸に出動させ、その結果、引き  
起こされたのが江華島事件です。江戸幕府が

倒れ、明治維新で天皇を頂点とする日本とい  
う国ができてまだ8年目ですよ。早くも朝鮮  
を武力で攻撃することを日本の海軍が始めた  
のです。

この江華島事件について、雲揚艦長井上良  
馨による「明治八年一〇月八日付報告書」  
(10・8報告書)というものが日本政府が諸外  
国に公表した正式の報告書とされています。  
『日本外交文書』などにも掲載されています。  
これには、雲揚が水を求めて（良水、探水、  
請水、とにかく水、水、水を求めて……と書  
かれています）、江華島に近づいたら撃たれた  
ので撃ち合いになり、砲台に上陸して戦闘を  
交え、やっと「清水」を得て……、という  
報告内容です。一日の事件だったように書か  
れています。

ところが、これはウソの報告書だったので  
す。実際は戦闘は三日にわたり、占領した砲  
台から大砲などを持ち出した後始末もいれる  
と四日もかかっていたのです。この経過を、  
井上良馨は長崎に帰って来た翌日、九月二九  
日に詳細に書いて提出していたのです。この  
ことを、東京大学の鈴木淳さんが、もう11年  
も前、2002年の『史学雑誌』に史料紹介をして  
明らかにされました。（「史料紹介「雲揚」  
艦長井上良馨の明治八年九月二九日付け 江  
華島事件報告書」『史学雑誌』2002年12月号）。

国交のない国の領域内で四日もいて戦争し  
ていたとなれば、国際的に問題になりかねない  
と、政府も考えて、長崎から井上良馨を呼び  
出し、水、水、水……とデタラメな報告書  
を作りかえたのです。これが、日本政府の公  
式の報告書（10・8報告書）なのです。

戦史を書きかえるなど、帝国主義国ではど  
こでもやっているのかもしれません、日本  
の場合、朝鮮侵略の最初からそうだったので  
すね。そして戦史の偽造、ウソの話を国民に  
「公式の戦史」として広めることが、日清戦  
争・日露戦争になって、もっと系統的に行わ  
れるようになりました。

日清戦争（1894～95年・明治27～28年）は、清国（中国）が朝鮮を属国としているのはけしからん、朝鮮の独立のために日本は戦うという触れ込み（宣戦の詔勅にそう書いてあります）で、日本は戦争を始めました。ところが、日清戦争の日本の武行使使の第一撃が、朝鮮の王宮を占領することだったのです。このことは、福島県立図書館の「佐藤文庫」にある参謀本部の書いた日清戦史の草案から詳細に明らかになりました。これは私が『歴史の偽造をただす』（高文研、1997年）という本を書いて詳しく解説していますので、それをご覧ください。

福島県立図書館の「佐藤文庫」には、参謀本部が作った「日露戦史編纂綱領」という文書もあります。どういう方針で日露戦史を編纂するのか、日本の軍部の最高機関である参謀本部が決めた方針です。

簡単に紹介します。草稿は事実を調べて正確に書くが、草稿ができあがった段階で、草稿を詳細に点検し、機密に関するることはすべて削除する、そのうえで「公刊戦史」を作るというのです。

草案点検の基準、「日露戦史史稿審査に関する注意」という文書には、「書いてはならない15か条」とも言うべきことがその理由と共に挙げられています。その11番目には「国際法違反または外交に影響すべき恐れある記事は記述すべからず」とあります。そしてその理由は「俘虜土人の虐待、もしくは中立侵害と誤られ得べきもの、または当局者の否認せる馬賊使用に関する等の記事のごとき、往々物議をかもしやすくひいては累を国交に及ぼし、あるいは我が軍の価値を減少する恐れがある故なり」というわけです。

自衛隊の戦史の専門家が書いた文献で、この「日露戦史編纂綱領」にふれたものを私は二つ知っていますが、その二つとも、この「日露戦史史稿審査に関する注意」の11番目の項目には、まったくふれていません。こんなことを旧日本軍が決めていたことすら、いまの

日本人に知らせたくない、——それが現在の自衛隊の立場なのでしょうか。

以上、お話をすることは、いわゆる「明治の栄光」と言われている時代、明治時代には朝鮮侵略のはじめの江華島事件から日清戦争・日露戦争の二大戦争についても、日本の政府・軍部は、国民に本当のことを伝えていなかつたし、いまも伝えていないということの話でした。

さて、明治以後、日本が朝鮮を侵略するのに使ったイデオロギー操作といいますか、思想宣伝のことについて考えなければなりません。さかんに言ったのは、「朝鮮の経済は停滞している、世界の発展から落伍している、そして弱体だからたえず周りの大國に寄りかかる自主性のない国だ」という朝鮮観を日本人に刷り込んだことです。そして大昔から日本は朝鮮を支配していたのだと、『古事記』や『日本書紀』にある神話、「神功皇后の三韓征伐」などを持ち出し、それがあたかも事実であったかのように言いふらしました。

明治になって、日本でも紙幣に人物の肖像が入るようになりますが、その第一号が「神功皇后」だったのです。「明治の日本」を象徴する話ですね。

こうした「朝鮮停滞／落伍／他律論」というのは、だから「日本が出て行って守ってやらないと中国やロシアに乗っ取られてしまう。そうなると日本の安全は保障できない」という、日本の朝鮮侵略の正当化のための「エセ理論」にすぎません。

また、朝鮮人が日本の侵略に公然と抵抗するそういう朝鮮の抗日闘争を、日本がむごたらしく弾圧し、朝鮮には正当な民族抵抗の勢力がまるでいないかのようにいうための宣伝に使われたのです。朝鮮にまつとうな「民族自主の思想や運動があるはずはなく、そういうことをやっているのは中国やロシア、またアメリカなどの手先か、あるいは凶悪な無法者に過ぎない。だから徹底的に弾圧する以外

「ない」と、朝鮮人の自主・独立の運動を敵視し続けてきました。それは第二次世界大戦後も、在日朝鮮人や日本にある朝鮮高校への差別、あるいはヘイトスピーチなど、いまにいたるまで、さまざまにずっと続いているのではないでしょうか。

NHKがドラマ化した「坂の上の雲」では、日清・日露戦争が主要なテーマであるにもかかわらず、朝鮮は無視されてました。豊島の海戦で日清戦争がはじまり、いきなり戦場は旅順に飛び、戦場化された朝鮮は、このドラマには登場しませんでした。

ただ一回だけ「朝鮮」が出てきました。それは日本軍が仁川に上陸し——もちろん仁川でロケが行われたのではありませんが——、清潔なパリッとした軍装の日本兵が雨中を進軍していく、その踏みにじったぬかるんだ泥道から、なにかを拾おうとする朝鮮人のずぶ濡れの子どもがチラット出てきましたね。実際にみすぼらしい、これ以上みすぼらしい場面は考えつかない、というような「朝鮮」をNHKはチラット見せたのです。

## 2. 敗戦後 —— 国会図書館憲政資料室、山辺健太郎さんのこと

日本の左派、進歩的といわれる人たちが、このような朝鮮と日本の関係をどのように見てきたのか。戦前の日本のマルクス主義者がどう見てきたのか、まだ十分に解明されていないと思います。

植民地問題の専門家で、戦争中は大学を追い出され、敗戦後復帰して、東京大学の総長にもなった矢内原忠雄さんには、1929年に『帝国主義下の台湾』という著作があります。日本の台湾の植民地支配について体系的に書かれた本です。ところが『帝国主義下の朝鮮』という著作はないのです。矢内原さんに若干の朝鮮関係の論文はありますが、体系的に日本の朝鮮支配を論じた著作はない。矢内原さんには日本の中でもない。

なぜないのか。これは今後研究してみなければなりません重要なテーマだと思います。

ところが、敗戦後、状況はかなり変わってきます。大きなことの一つに、国立国会図書館に憲政資料室ができたことがあります。明治以後の政治家や軍人たちが個人的に持っていた文書・記録がここに集められました。資料の蒐集、公開の中心になったのは大久保利謙さん、大久保利通の孫です。(憲政資料室については大久保利謙さんの著書『日本近代史学事始め』岩波新書に詳しいので読んでください)。

その中には、有力な政治家たちの文書、日清戦争の時、外務大臣であった陸奥宗光関係文書もありました。敗戦前の天皇制の専制政治のもとでは考えられないことですね。天皇制の下で、隠されていた事実が明らかにされ、それを使って研究者が論文を書くことが可能になりました。

一方、敗戦後の日本の政界・思想界の大勢としては、植民地問題、とりわけ朝鮮問題は「棚上げ」の状態が続きます。東京裁判は日本の朝鮮に対する植民地支配の問題はまったく取り上げませんでした。天皇の戦争責任も追究しませんでした。

こういう大勢でしたから、日本人の中で、朝鮮問題について考えようとする人が、問題の重要性に見合うほどにはあらわれなかった。ごく一部の日本人、在日朝鮮人の研究者が憲政資料室の資料などを使って、明治時代に遡って朝鮮問題に向き合いましたが、日本全体から見ればそう多くはありません。大多数の研究者の関心は、近代史についていえば満州事変以後に向っていました。

そして「満州事変以後、アホな戦争をやって日本を敗戦に至らしめた」と、東条英機ら一部の陸軍幹部に責任を負わせて、日本の敗戦の分析を終わりにしたといってよい状況でしたね。2003年、外務省が公表した『日本外交の過誤』(1951年4月ごろ作成終了)という文書も、満州事変からのことしか書いてい

ません。

そういう形で、敗戦後も、満州事変以前の問題を明治に遡って解明しようという風潮はきわめて微弱で、そのかわり「明治の栄光」を喧伝する声が、右肩上がりの経済成長とマッチして日本の大勢を制してきたのです。

そんな中で、私がなぜ日清戦争をはじめ近代日本と朝鮮の関係に注目して勉強してきたのか、ということをお話しします。

皆さん、「山辺健太郎」という人をご存知ですか？ — 山辺健太郎というのは敗戦前の日本で非転向を貫いた共産党員でした。1905年、別府で生まれ、学歴は小学校卒だけですが、大変頭のいい人で、成長して大正の中頃、大阪に出てきて丸善の小僧になりました。そこで社会主義者と知り合い、語学も自学自修したようです。やがて労働運動の世界に投じ、1929年（昭和4年）の4・16事件で逮捕され、1933年まで投獄れされていました。ところが転向しないので、太平洋戦争の始まる前にまた逮捕され、予防拘禁所にいれられました。予防拘禁所というのは、転向しない人を一生閉じ込めておく監獄です。

敗戦後も二ヵ月近くたって、1945年10月10日に出獄してきます。

彼はおそらく関東大震災のころから朝鮮人労働者とつきあいがあったようです。予防拘禁所では、在日朝鮮人労働運動の指導者であった金天海と一緒にでした。

そういうことから山辺さんは戦前の日本を理解するのに、日本の朝鮮侵略を理解しないとわからない。野呂栄太郎の『日本資本主義発達史』も立派な本だが、朝鮮侵略のことは書いていない、ということをいち早く言って、自分で朝鮮問題の歴史的な勉強を始めました。国会図書館の憲政資料室に通い著作活動をもっぱらにするようになりました。

山辺さんの仕事としては、みすず書房のほう大きな叢書、「現代史資料」の中の『社会主義運動』(1~7)の編纂が大きな仕事ですが、朝

鮮関係についても岩波新書に『日韓併合小史』、『日本統治下の朝鮮』があります。また、そして自分の半生を書いた『社会主義運動半世紀』も岩波新書にあります。

私も卒業論文で「大阪事件」（自由党の左派といわれた大井憲太郎らが中心になって、自由民権運動の衰退期、1885年・明治18年、朝鮮の政治に介入し、清国と緊張を生じさせ、日本人の対外関心を高め、同時に日本の内政改革も押し進めようと画策し、大阪で関係者が逮捕された事件）を書いて、日本の近代を理解するには朝鮮問題が大事だな、と考え始めていましたが、1956年ごろから山辺さんとのつきあいがはじまりました。

二人とも「向こう見ず」なところがある、馬が合ったのか、1977年の亡くなられるまで、ずっとおつきあいをしておりました。そのおかげで、私は日本の朝鮮侵略の問題を注視しながらずっと研究を続けてきました。

### 3. 日本人にとって歴史を見る視座をただすキイは朝鮮認識だ

それでは、最後に、朝鮮は日本政府が言ってきたように、日本が助けないとなにもできない無力な国だったのか。そんなことはない。日本は朝鮮を植民地にするために、朝鮮にずいぶんひどいことをしてきた。それに対して朝鮮人はどうしたのか、是非考えていただきたい。

李氏朝鮮王朝は日本では足利義満の時代、1392年に建国し、500年も続いている王朝です。徳川幕府の二倍ぐらいの長い時代続いてきた王朝です。そんな伝統のある国ですから、国王は国王で、王妃は王妃で、そして官僚も、宗教家も、指導的な農民たちも、それぞれに国の将来を考えていました。19世紀になって日本を始め外国の圧力が強まるにつれ、そういう思いはいろいろな形で登場してきました。

それを日本は潰したのです。その代表的な例が、東学農民軍の殲滅作戦です。最近、私たちは『東学農民戦争と日本 — もう一つの

『日清戦争』（中塚明・井上勝生・朴孟洙共著、高文研）という本を出しました。

東学農民軍が日本の王宮占領に抗議して全國的にたち上がります。当時の朝鮮の総人口は1000万人ぐらい。その時、200～300万人の朝鮮人が決起して日本軍と戦うのです。日本政府・軍は三個中隊の後備兵役の日本軍をわざわざ送って、「悉く殺戮せよ」という命令をだして、東学農民軍のジェノサイド作戦をやりました。

1894年・明治27年の10月28日に、広島にいた伊藤博文首相、川上操六参謀次長らが大本営で急遽相談してこの東学農民軍の皆殺し作戦をたて、実行を命じたのです。伊藤博文は東京にいた陸奥宗光外務大臣とも緊密に連絡していました。

いま日本の巷間には、「伊藤博文は平和主義者だった」というような「高説」が聞かれます。しかし、その伊藤博文も核心の一人として、この東学農民皆殺しの命令を出したのです。

しかし、日本政府・日本軍は、このジェノサイド作戦を隠しています。

日本軍はライフル銃を持っています。竹槍を主な武器としていた朝鮮農民は日本軍の近代的火器でなぎ倒されるように殺されました。しかし、中には小銃を持っている東学農民もいて、この鎮圧戦争で日本兵が一人だけ撃たれて死んでいます。徳島県出身の杉野虎吉という上等兵です。明治27年12月10日、忠清道連山というところで戦死したことが、徳島の新聞にも報道されています。井上さんが現地を調査して、杉野虎吉の兄が立てた忠魂碑が現存しているのも確認しました。

皆さんのご存知でしょうか、『靖国神社忠魂史』という明治のはじめから満州事変の初期まで、戦死者のすべての名前を列記している龐大な本があります。その第一巻に杉野虎吉の名前もありました。ところがなんと「明治二七年七月二九日、成歎」で戦死したことになっています。成歎の戦いというのは、日清

戦争で日本軍が清国軍と陸上で初めて交戦した戦闘です。そのころ杉野たちは召集令状を受けてまだ松山にいました。

このように朝鮮人が抗日の戦いに決起したこと、そしてそれを日本軍が系統的に弾圧してきたことが、日本では歴史の記憶から抹殺されているのです。

こんなことをしていたのでは、日韓・日朝の平和的な関係を築けるはずがありません。

日本人の歴史認識を改めるキイは、まさに日本が朝鮮でなにをしたのか、朝鮮人はどう生きたのか、それをしっかりと認識することにあるのではないでしょうか。

私は日本でひろく呼びかけて「東学農民軍の歴史を訪ねる旅」を継続して、企画・実行しています。富士国際旅行社の企画にもなつて、韓国の友人とも共同で計画して実行しているツアーです。今年も行きます。2006年から連續、今年で第八回を迎えます。歴史の記憶をよみがえらせる旅です。どうぞご一緒してください。このツアーが歩み始めた道は、また小さな道ですが、この道が大きく拓かれることを念願しています。

日韓の民間交流の拡大が、両国の民衆のレベルでの歴史認識の深化、発展に貢献することはまちがいありません。皆さんのご活躍を祈念いたします。

ご静聴、ありがとうございました。

(2013.6.30)